

# 話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル ——小集団ディスカッションを通して——（その2）

張 麗

## 1. はじめに

近年、中国と日本の間において、ビジネス、留学、旅行などあらゆる面で、様々な交流がますます盛んになってきている。中国人と日本人は相互理解を深めていくと同時に、思わぬ誤解やすれ違いなども起きている。その一要因として、我々がいわば無意識に行っているコミュニケーションのやり方、つまりコミュニケーション・スタイルの違いが挙げられる。

コミュニケーション・スタイルについての研究は、異文化コミュニケーションの分野では東洋対西洋のような大きなくくり、日・米や中・米のようなやや小さなくくりで行われてきた。東洋＝集団主義＝高コンテクスト・コミュニケーション・スタイルという図式の中で、中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルがあたかも、同質であるかのような印象を与えてきた恐れがある（Nadamitsu, Chen & Friedrich, 2000）。

例えば、Gudykunst & Ting-Toomy（1988）は言語コミュニケーション・スタイルの分類を文化との関係性によって4つに分類し、中国も日本も集団主義文化の国として、中国語も日本語も同じ、間接表現スタイルとコンテクスト中心スタイルがよく使われていると指摘している。中国語が「コンテクスト中心」（context-oriented）であるため、物事を言うとき、その人の置かれている状況を長く説明する傾向がある。日本語の場合は、「地位指向の」（status-oriented）言語であるため、相手との親疎・上下・ウチ・ソトの関係により、言語表現を選ぶ。status-oriented と context-oriented 言語は形式・儀礼と（非対称）の力関係を重視するとも述べている。また、Gao & Ting-Toomy（1998）によれば、中国人のコミュニケーション・スタイルの特徴として、直接的に表現するより、言外の意味が大切で、聞き手中心、丁寧さに基づき、仲間かそうでないかが影響するとしている。ウチ・ソトによって違ってくるという伝統的な中国文化に基づいた見方が挙げられている。

このため、中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルに関する研究は少ないばかりでなく、実際の談話データなどに基づくミクロの視点からの研究は限定的にしか行われていない。異文化コミュニケーションという枠組みを用いて、各文化小集団内での談話を分析し、それぞれの特徴を対比分析するものが主流である。その一例として、日米中のコミュニケーション様式についての中国人と日本人の小集団ディスカッションに関する研究は久米ら（2000）が挙げられる。

久米ら（2000, 2001）の日米中のコミュニケーション様式の研究において、コミュニケーションの志向性、メッセージの方向性・構成、コミュニケーションの比重からみると、中国人が対決型・直線型、話

し手中心であるのに対し、日本人が迂回型・渦巻き型、聞き手中心である。話し言葉のスタイルの比較では、断りと批判するとき中国人が直接的で、日本人が間接であるが、察し・気配りの点では中国人より日本人が多いと指摘している。

また、課題設定小集団討論における中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴について次のようにまとめている。話者交替では、中国人が一人ずつ、まとまった発言をするケースが多く、交替は頻繁に見られない。タスク・課題の達成において、中国人は主題からの乖離が少なく、ずっと主題をめぐるように話し続ける。意見表示方法に関して、だいたい直接自分の意見を表明するような表現の仕方を取っている。そして他人の意見に賛成する傾向があり、不賛成の意見があまり見られない。他者配慮では「同時発話」はあまり見られない。話し方について、割り込みがよく見られ、会話独占も見られる。

一方、日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴については、主題から乖離してももどさず、メンバーの共有する話題などで盛り上がりを促進する傾向があるが、これは、議論において、課題達成よりも「場」や人間関係あるいは会話を楽しむことを重視する傾向を反映しているためだとしている。話者交替の回数が多い。意見の表し方について、始めは意見を強く言わず、相手の反応によって意見を明確に断定的に述べる傾向がある。反論する時には間接的に表現して、また、ストレートに意見を述べた場合は、意見を言った後に、自分自身が笑う場面も観察される。話し方について、割り込みが少ないが、会話独占が見られる。

さらに、議論の仕方について見ると、中国人がスピーチのような形式で、日本人がプライベート・トークのような形であると分析している。反論時には、日本人と比べて、中国人はアメリカ人と似ていて、躊躇なく、丁寧に反対意見を表すとされる。中国人のコミュニケーション・スタイルについて、「自己開示の程度が大きく」、「積極的」、人間関係の構築や維持において、プライドが高く、必要に応じて「躊躇なく自己主張をする」。一方、日本人のコミュニケーション・スタイルは、とりわけ、対人関係および話し合いが行われている「場」に大きく依存し、相手を傷つけまいとも指摘している。

久米らのこれらの指摘は、Gao & Ting-Toomy (1998) の所見と異なった結果となった。そこで、筆者は異文化コミュニケーションの場において、発言権の獲得としての話者交替のスタイルに焦点を当て、中国人と日本人が「自己主張」するときのコミュニケーション・スタイルがどのように異なるのか、使用言語が日本語の場合と中国語の場合で討論に何か違いがでるのかについて、データを収集し、分析を試みた。

まず、日本語のデータを使って分析し、実証的な試みをした(張, 2009)。その分析の結果(本論2参照)では、従来の中国人・日本人の小集団討論についての対照研究によっては観察され難かった点として、従来の研究で言われてきたような日本人の対決回避や衝突回避の傾向が、実は相手に応じた会話パターンであり、日本人がいつも自己主張しないのではなく、相手によっては自己主張を行うことがあるということが、この異文化小集団ディスカッションの「場」において、みられたのである。

しかし、会話スタイルはコンテキスト依存性が高い。また、コンテキストも「静的な構造ではなくむしろ、参加者が相互行為するにつれ展開し変わっていく動的なプロセスを反映しているということである」(ガンパーズ, 2004, p.172)。したがって、会話スタイルはコミュニケーションという相互行為を行うプロ

セスの中でダイナミックに変化しており、民族・人種・場・相手・社会関係などによって、同じ言語、同じ人であってもそのスタイルが常に変わるのである。林(1996)の日本らしさの構造についての研究では、日本人は使用言語を変えるとその人らしさも変わるという指摘がある。一方、スコロン&スコロン(1991)によると、文化背景の異なる人々がコミュニケーションをしているとき、同一言語を使っても、それぞれが気づいていないにもかかわらず、自文化の発想に影響されるとされている(許, 2000, p.19)。

以上のことを視野に入れて、本論は中国語による討論のデータを、同じ方法で、日本語データの分析結果と比べながら、中国語で行ったディスカッションにおける話者交替の回数・パターン・内容(目的)について分析・考察を行った。そこに浮かび上がった話者交替のスタイルの特徴から、発言権の獲得としての話者交替が中日でどのようにみられるのかに基づき、中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの特徴の相違点を明らかにした。その上で、使用言語というコンテキストの変化によって、中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴がどのように変わっているのか、そこにみられた両者の相違点に焦点をあて分析した。

## 2. 日本語によるディスカッションから得られた結果

本論は使用言語により、話者交替のスタイルにみられた中日「自己主張」のスタイルの特徴の変化に焦点を当てるため、本論の土台になっている日本語による討論のデータ分析の結果をここで概略的に述べる。

まず、データ分析の結果からみると、日本人が中国人と差があるとすれば、それは自己主張をするか否かではなく、その主張の仕方に違いがよく現われていることがわかる。また、日本人の場合は個人差がよく見られる。

中日の相違点は次のように対照的となっている。小集団ディスカッションへの参加ということをもとにどうとらえているかから見ると、中国人が「積極参与協力」・「タスク」として認識しているのに対して、日本人は「消極参与協力」・「参加者」として認識していると言える。また、発話の内容をどのように展開するかから見ると、中国人が「直接表明」・「意見中心」・「自己中心」で、日本人が「間接反応」・「対人中心」・「他己中心」である。中国人は積極的にはっきりと自己主張をするのに対し、日本人は消極的で控えめ、防衛的であり、柔軟な自己主張の仕方を行うが、その控えめさの内に自己を強く主張している(船津, 1999, pp. 187-192)。

日本人の対人コミュニケーション・スタイルの特徴について、「まず人間関係があって、コミュニケーション関係はそれに従順している」(橋本ら, 1993, p.39)という指摘がある。この特徴は平賀(1996)の日本語とヨーロッパ諸語の謝罪についての対比研究に見事に反映されている。「日本語の謝罪のコミュニケーションはまず人間関係にかかわる社会的な要因に左右されていることがわかる。謝る人と謝られる人との力関係と親疎関係によって、謝りの表現も違えばストラテジーの組み合わせ方も違ってくる」(1996, pp. 23-24)と同じように、今回の小集団討論の日本語データにも異なる側面・異なる形で現われ、その多様性が窺われる。それは従来の小集団研究によっては観察され難かった点が得られたことでもある。

即ち従来の研究で言われてきたような日本人の対決回避や衝突回避の傾向が、実は相手に応じた会話パターンであり、相手によって自己主張を行う事があるという点である。日本人会話参加者は、中国人とは激論を交わしたのに、日本人に対しては反論をしなかった。これは、上記を裏付ける会話パターンである。つまり、日本人はいつも自己主張をしないというのではなく、相手に応じて、自己主張の戦略を使い分けているのである。

中国人と日本人の自己主張の仕方に現れた違いが、中国人の自己主張では積極さと率直さがより明らかになっているのに対し、日本人の自己主張は対人関係による戦略的多様性が目立っている。中国人が熱意・責任感・義務感を基盤に主張をしているのと比べて、日本人は個人の立場をわきまえ、控えめに方略的に主張をしているのである。

### 3. 研究方法

#### (1) 調査方法

本研究は普通の日常会話の場面と異なり、順番に発言権を取ることにより、制限時間内で参加者がそれぞれ如何に積極的かつ方略的に多くの発言権を獲得し自分の意見や考えを主張することに意義が置かれるかを観察するため、課題設定小集団討論 (task-oriented small group discussion) というマイクロ・レベルの実証的質的研究方法で行った。また、会話スタイルはコンテキスト依存性が高く、民族・人種・場・相手・社会関係などによって、同じ言語、同じ人であってもそのスタイルがコミュニケーションという相互行為を行うプロセスの中でダイナミックに変化している。したがって、参加者選びや、ディスカッションの使用言語、トピックの妥当性などについてパイロット・ディスカッションを実施した上で行った。

#### (2) データ収集

参加者選びにあたっては、知人や友人に依頼し、その人々から紹介してもらうという雪だるま方式を取った。日本人参加者は外国人との接触経験の多い、外国人との交流に積極的な意識をもっている世代である 20 代後半から 40 代前半 (「第 7 回現代日本人の意識調査」NHK, 2003) にした。その結果、30 代前半から 40 代前半が大半を占める、18 名の中国人・日本人 (表 1) を集めた。中国人参加者は全員中国文化を十分に身につけた後に来日した者であり、日本人参加者は全員中国語のできる者である。

データ収集の行なわれた時間と場所について、グループ 1 は 2007 年 8 月 6 日、グループ 2 は 8 月 18 日に立教大学 11 号館 3 階にある独立研究科院生室で行われ、グループ 3 は 9 月 7 日に東京都内にある一四中国語教室で実施した。

研究データは、18 名の中国人・日本人から 3 つの小集団を作った。中国人・日本人 3 名ずつが参加する 3 つのグループに対して同じテーマを与え、日本語と中国語の両言語によるディスカッションを同時に行った。各グループで収集した音声データ (15 分間) における話者交替の回数・パターン・内容 (目的) について分析・考察を行った。

表1 参加者一覧 (C =中国人、J =日本人)

グループ	仮名	性別	年齢	職業	在日期間 or 中国語学習年数*
1	C1.1	男	40代前半	大学講師	15年
	C1.2	女	50代前半	大学講師	14年
	C1.3	男	50代前半	大学講師	14年
	J1.1	女	40代前半	大学講師	18年(中国で仕事2年)
	J1.2	女	40代前半	大学講師	22年(留学1年)
	J1.3	女	40代前半	翻訳者	22年(留学3年)
2	C2.1	男	30代前半	会社員	7年
	C2.2	女	40代前半	会社員	16年
	C2.3	男	40代前半	会社員	16年
	J2.1	男	30代前半	会社員	8年(台湾留学1年)
	J2.2	女	30代前半	会社員	10年(留学等1年半)
	J2.3	女	30代前半	大学講師	10年(台湾留学1年)
3	C3.1	女	40代後半	大学講師	20年
	C3.2	男	50代後半	教師	18年
	C3.3	男	50代前半	新聞記者	6年
	J3.1	女	30代前半	自営業	13年(留学1年半)
	J3.2	女	30代前半	主婦	5年
	J3.3	女	30代後半	フリー	10年(留学2年)

\*表記の中国語学習年数は、学習期間実数ではなく、習い始めてから2007年8月までの経過年数。

### 課題(トピック)

研究協力者には「どんな家庭を築きたいと思いますか」というトピックのもとに下記の項目を参考にしながら自由に話し合ってもらった。

参考項目 家族関係：夫婦関係・親子関係

家族構成：子供・夫婦だけ

居住環境：家・環境

データ分析の参考にするため、小集団ディスカッションの終了後、参加者全員に次のような簡単なフォローアップ・アンケート調査も行った。

①今日のディスカッションの中で、あなたが自分の意見や考えなどを思い通りに話せましたか？

はい・いいえ

②「いいえ」と答えた方にその理由を聞かせてください(思ったままで結構です。)

### (3) 分析の方法と分析の枠組み

#### 1) 「話者交替」と「自己主張」の定義

##### ① 「話者交替」の定義

話者交替については、「日常会話の順番取りシステム (the turn-taking system for conversation)」として、Sacks et al. (1974) が通常のターンの交替について定式化しているルールに従いながら、本研究の目的に合わせて、話者交替の「ターン」を次の2種類とする。a. 一発話が終了し、話し手がポーズを置いたところに、現在の発話者・話し手が発言をするか、または自ら次の発言権を取って順番移行したことを話者交替 (ターン交替) とする。このような移行適切場所 (transition relevance place, TRP) (Sacks et al., 1974) での話者交替を「TRP ターン」という。b. 自ら次の発言権を取った場合は、移行適切場所 (TRP) でないところに行われた話者交替を「割り込み」のターンという。「割り込み」は聞き手の役割の視点から「予測」の機能の中の「先取り発話」にあたり (堀口, 1997)、割り込みを重複の一部として、「深い巻き込み型 (high involvement style)」の会話スタイル (Tannen, 1984) と考えている。しかし、「あいづち」は本研究の分析対象に含めない。

##### ② 「自己主張」の定義

本研究においては、「自己主張」とは中国人と日本人が参加する課題設定小集団討論という枠組みの中で、自分の意見や反論など表示するために発言権を獲得すること、すなわち、話者交替の「ターン」をとることと定義する。その上で、何の目的で発言権 (「ターン」) をとるか、つまり、何を発言するか (言語による意見・反論の提示などの発言内容)、またどのような方法で発言権を取るのか (「TRP ターン」か「割り込みターン」か) について分析を試みる。

#### 2) データ分析用フレーム (項目)

話者交替のスタイルを考察する際に、回数・パターン・内容 (目的) の三つに焦点を合わせて考える。したがって、話者交替の分析用フレームとしては以下のような項目を設定している。

##### ① 「ターン」のパターン: 「TRP ターン」と「割り込みターン」

「ターン」の内容 (目的): 意見・反論・質問・応答・支援の5種類である。

「ターン」の他に各グループの会話独占者 (発話時間が長く、発話回数も多い者) を発話時間と発話回数により高順位から6名ずつを取り出した。

##### ② 「積極的さ・直接的さ・自己中心・他者配慮」の度合いを測る「ターン」の分類

- ・積極的さを反映する「ターン」: 意見提示・反論・質問・割込
- ・他者配慮の度合いを反映する「ターン」: 質問・支援
- ・自己中心の度合いを反映する「ターン」: 割り込みと会話独占者の人数を合わせて判断する
- ・意見表示の直接的さを反映する「ターン」: 意見・反論・応答・割り込み

##### ③ データの表示方法 (表1)

参加者仮名: C 1.1 (グループ1の中国人1)、J 1.1 (グループ1の日本人1)、性別は必要に応じて男性に m、女性に f を加える

④引用した会話例に使われる表記の説明

- ( ) 内はターンと認められなかった「あいづち」
- “……” は話者の話しが未完了のまま割り込みされた
- “…” は発話者のことばが詰まっていたとき
- 「以下省略」はそれ以降の会話内容の文字表記が省略された
- 「一部省略」は引用文の日本語訳が一部省略された

3) 分析方法

会話のデータを文字化し、その回数・パターンと話者がどのような目的をもってその「ターン」を取ったかを合わせて、話者交替のパターン（スタイル）を分析した上で、「自己主張」のスタイルを考察する。即ち人々が「今、ここ」でどのように会話しているのかを詳細に観察し、分析することで、相互作用能力や会話組織化の装置、会話現象を構成している人々の現実認知の様相を具体的に抽出・呈示しているというエスノメソドロジー（メイナード、1993）の会話分析における手法を用いた。

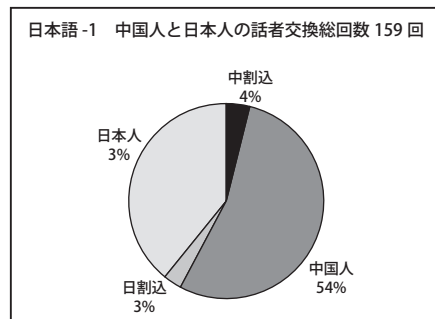
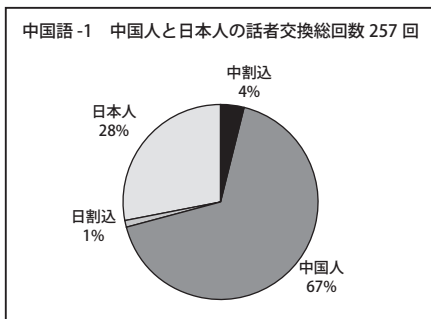
4. データの結果と分析

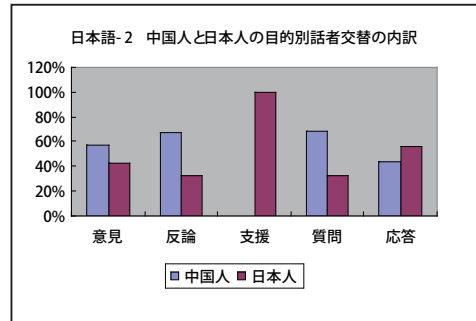
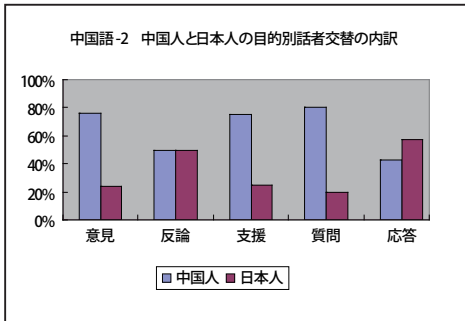
(1) データの結果（中国語グラフ1, 2・日本語グラフ1, 2）

3つのグループによる45分の討論において、話者交替の総回数は257回で、話者交替のパターンはTRP「ターン」は247回（95%）、割り込み「ターン」は12回（5%）であった。話者交替の回数における中国人と日本人との出現比率は、前者が71%、後者が29%であった。日本語データと比べると、全体的に、中国人の発話回数が増え、比率も58%から上がったのに対して、日本人では回数が増えたものの比率が42%から下がった。また、前回はグループによる比率のばらつきはなかったが、今回はグループ2だけは中国人の話者交替回数が日本人の4倍にもなり、ばらつきが見られた。

(2) データ結果の分析

ターンごとの発話内容を分析し、それに基づき、ターンの目的を以下の通り分類した。すなわち、意見、反論、質問、応答、支援の5種である。「割り込み」ターン、会話独占も合わせて、前回の日本語での小集団討論の分析結果を踏まえながら、会話例から分析・考察を加えた。





### 1) 意見表示のための「ターン」取り

意見表示のための「ターン」取りでは、日本語による討論に比べ、中国人も日本人も多いことがわかった。中国人が118回(76%) (日本語では41回(57%)、日本人が37回(24%) (日本語では31回(43%)であった。中国人の方が日本人の3倍にもなった。これは恐らく、中国人にとっては母語である中国語で討論をすることによって、「自己主張」の積極的さの程度が日本人に比べ際だって表出したのではないかとと思われる。また、意見表示の仕方では、中国人は、使用言語にかかわらず論理的に「はっきりと意見表示」する者が多い。一方、日本人では、前回にみられたような多様な意見表示の仕方はあまり観察されなかった。全体として、まとまった長い発話、論理的な意見表示はほとんど見られなかった。これは、日本人の積極的さの度合いが低いというよりも、意見表示の仕方には言語による影響があったのではないかと考える。すなわち、日本人は母語で議論する場合と非母語である中国語で議論する場合で、意見表示の仕方が異なるということである。

### 2) 反論をするための「ターン」取り

反論の「ターン」取りでは、日本語による討論では中国人が20回(67%)と日本人の2倍であったが、中国語による討論では両者とも12回(50%)であった。中日の出現比率に差が見られたものの、反論するときのパターンには変わりが観察されない。

中国人は、日本人とも中国人同士とも反論・激論をよくする。一方日本人は、中国人との対決・議論はあるが、日本人同士の間には観点的な反論よりも情報確認の意見の食い違いを指摘する程度で、中国人のような反論はなかった。この違いは、日本語で行った討論の場合と一致している。日本人が、中国人との議論・中国人への反論を行う場合、中国語では、論理的な発言をさげ、短くソフトな形で行われた。そして、参加者も話題もそれぞれ異なっていた3つのグループにおいて、同じ結果が観察された。

八 ここで注目すべきことは、日本人が母語でないという言語不利のコンテキストにおいて、むしろ反論の回数が多かったという点である。異文化コミュニケーションの場において、日本人の対人コミュニケーション・スタイルは対人関係に大きく左右されるという特徴をもっている。この特徴は母語ではない中国語使用というコンテキストの中でも観察された。日本人が「場」(コンテキスト)によって、自己主張のストラテジーを使い分ける、そのストラテジーの多様性はここでも見られた。

日本人の反論の仕方にもみられる差は、母語でない言語使用と密接に関係していると考えられるが、研究



協力者全員にはあてはまらない。また、中国人の反論の「ターン」取りが少なくなったのは話題の内容が一要因と考えられる。グループ1とグループ2とも、「食について」の話題を中心に討論を進めていたため、話題の内容が議論になりにくい、論理的に発展し難い面もあるからであろう。

例1 (料理の味についての話から、日本人の物事の考え方で話題が展開されて)

C1.3: 调料都一样。但是反过来就是说也可能我这个感觉是错的, 就觉得日本人呢他这个一旦认同了这个菜的话, 你这个口味再变一点, 可能他就会躲得远远的了。所以说一旦固定了以后, 他觉得这个味道好吃, 那么你这个味道可能就是说就必须是这个味儿了。你比如就是说在炒的时候, 盐放多少克, 那个酱油放多少克, 或者说那个糖放多少克, 就是说你稍微今天这个菜酱油多放了一克, 那个日本人可能一吃觉得味道不对起来就走人, 是不是那么回事啊? (女众笑)

(一部省略…私の思い違いかもしれませんが、なんか日本人は、いったんこの味がいいと思うと、味がちょっと変わっただけで、敬遠するようになるみたい。いったん定番の味が決まり、この味がいいと思うと、塩何グラム、醤油何グラム、砂糖何グラムと決めていて、お醤油を1グラムでも多めに入れたら、あっ、味が違う!と。それでもう食べなくなってしまう。そういうことないですか?) (J1.1、J1.2、J1.3 笑)

J1.2: 嗯…诶…不一定吧。(う…ん、そんなこともないでしょう。) 反論

C1.3: 你们肯定就是说都到过中国, 不仅就是吃过了在日本的中华料理店的料理, 那么就是在这个中国当地的, 那个料理也都是吃过, 也不是说吃一次两次的。

(皆さんはきっと中国に行ったことがあるでしょうし、日本の中華料理だけじゃなく、中国で本場の中国料理も食べたことがあるでしょう。それも1回、2回じゃなく。)

J1.1: 最近在日本有很多中国人开的那些店 (J1.3: 典型的。) 反論

(最近日本でも中国人がやってる店がたくさんありますよね。(J1.3: 典型的な)

我们喜欢去这种地方吃饭。

(私たちもそういう店に食べに行くのが好きです。)

C1.3: 啊, 新开的。那就是说有这种新鲜感, 是吧?

(そうね。新しくオープンした店ですよ。それはある種の新鮮な感じでしょう?)

J1.1: 不一定吧, 因为我们没留过学, 我没留过学, 但是那个在北京呆过两年, 我也喜欢地道的中国菜, 不太喜欢日本式的菜。

(そういうのではなくって。私は留学がしたことはありませんが、仕事で2年間北京に滞在したことがあります。私も本場の中華料理が好きで、日本風の中華はあまり好きじゃないです。) 反論

### 3) 質問と応答の「ターン」取り

質問と応答の「ターン」においては、中国人は質問する回数が33回(79%)もあったが、日本人は応答が16回(57%)と多かった。これは、日本語で行った討論とは中日の質問の出現率が逆である。また日本語の場合と同じく、中国人の質問は情報確認のものが大半占めていたが、なかには自分の意見を述べたあと、相手に確認したり、相手の意見や考えを聞いたり・発話誘発したりするケースもよくあった。し

かし、自分の意見を表さず、相手の意見や考えだけを誘発して話させることはほとんど見られなかった。それは中国人のコミュニケーション・スタイルにそぐわないからであろう。

質問は「聞き手の積極的な会話参加によるものである」(堀口, 1997, p. 242)と同時に、意見表示の仕方からみると、より間接的「ターン」とも判断される。相手の意見を先に聞くのは、相手に対する配慮だけではなく、自己開示度が低く、自分を守ることも含まれていたと思われる。また、「聞き手からの働きかけによって、話し手は話を展開し、発展させていく」日本人の会話の特徴(堀口, 1997, p. 247)は今回の中国語のデータに、日本人よりも中国人の発話によく見られた。

中国語での討論データの結果からは、中日の質問と応答の「ターン」とりの頻度が逆転していることがわかるが、質問の仕方には中国人、日本人それぞれのコミュニケーション・スタイルが表出しており、使用言語による影響があったとは言い難い。

#### 4) 支援(助言・補足・訂正を含む)の「ターン」取り

支援の「ターン」とりは、日本語による討論において、日本人が2回に対して、中国人は皆無だった。中国語のデータでは、中国人が6回(75%)で、日本人の2回(25%)を大きく上回った。この「ターン」に多くみられたのは、発話者が非母語である中国語または日本語を使って意見表示、とくに語句レベルの言語表現がスムーズにできなかったときに、互いに助言したり、訂正したりして助け合ったものであった。この「ターン」取りは、使用言語により変化が現れやすく、参加者にとって、討論に使用する言語が母語であるか否かにかかなり関係していると思われる。また、これまで多くの研究では、対照的に言われている中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴の一つである、「自己中心的中国人」・「察しと他者配慮的日本人」という図式は、中国語による討論という異文化コミュニケーションの「場」では逆転して出現し、中国人のもつ「他者配慮」という側面がはっきりと反映されたといえよう。

今回のような文化背景の異なる参加者による課題設定小集団ディスカッション、いわゆる相互行為の異文化コミュニケーションの場においては、参加者として、積極的に多くの発言権を獲得して、自分の意見や考えを主張するのは当然の「義務」と「権利」であるが、意思疎通を互いに尊重し、助け合うことも、当小集団の目的達成にはきわめて重要であるといえよう。したがって、「自己主張」の他者配慮度を測るには大いに意味がある「ターン」である。

#### 例3

J3.2: 我结婚的时候 24 岁, 所以很年轻, 所以没…

(結婚したときは24歳だったので、若かったから、…なかったです)

C3.1: 没有想这么多。(それほど考えなかったです) 支援

J3.2: 嗯, 对对对。(えん、そうそうそう。)

#### 例4

C2.1: 大长金就是韩国的, 日语叫什么, 那个大长今…

(韓国のあの「大長金」、日本語ではなんというかなあ…あの「大長金」…)

J2.3: チャングムの誓い 支援

### 5) 割り込みの「ターン」

割り込みの「ターン」において、日本語のデータでは、中国人と日本人が一回の差しかなかったが、中国語のデータでは中国人が9回(75%)、日本人が3回(25%)であった。これは、話者交替全体の4%を中国人の割り込みターンが占め、日本人の割り込みターンは1%しかないということをしめしており、両者の頻度の差がみられた。中国人が中国語による討論において、「割り込み」が多いという久米ら(2000)の研究結果・所見と一致していた。

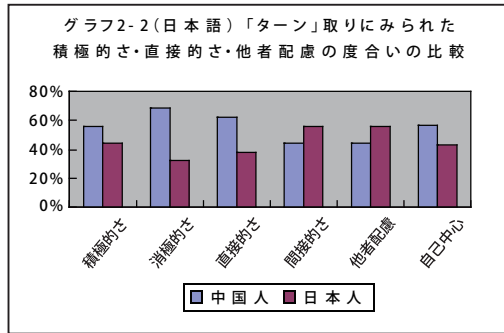
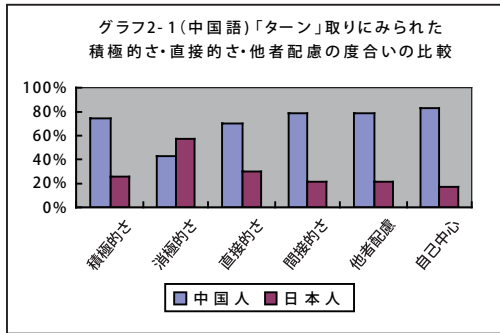
その一要因として、非母語である中国語による討論において、日本人には中国語の習熟度によって割り込みのタイミングに影響が生じやすいのは否定できない。とはいえ、発言権を獲得するための割り込みの多くは会話参加者として会話を共に作り上げる役割を果たしている相互行為のコミュニケーションであるため、割り込みというのはすなわち、「聞き手の先取りに反応を示すというのはコミュニケーションを進めるための有効な手段で」(堀口、1997,p.99)「深い巻き込み型」の会話スタイルであるとされる。今回の課題設定小集団討論においても、中国人と日本人との討論への積極的さに差があったと思われる。それは、日本人の議論に対する消極的な反応にも大に関係すると考えられる。

### 6) 会話独占

会話独占は他者配慮と自己中心の度合を計るには重要な項目になる。会話独占は発話時間が長く発話回数が多い場合であり、それぞれ6位までを取り出してまとめた。日本語データの場合では、発話時間による会話独占者には日本人が3人、発話回数では、日本人は2人であったが、今回の中国語データでは発話回数による会話独占者には日本人が1人しかいなく、しかも6位であった。発話時間からの会話独占者は日本人がゼロであった。特に会話時間による会話独占からみると、日本人には非母語である中国語を使用することによる影響がかなり大きかったと思われる。発話時間からみると、母語である中国語を使う中国人が思う存分に意見表示ができたことにより、「とにかく話す」という言語コミュニケーション・スタイルの特徴がより自然に・ありのまま反映され、いっそう際立っている。一方、日本人が、非母語である中国語使用という言語不利のコンテキストにおかれ、当然ながら意見表示に自由さが抑えられて、もともと「話さぬ」といわれている日本人の言語によるコミュニケーション・スタイルの特徴がより対照的に映し出されたといえるであろう。

### (3) 使用言語による話者交替のスタイルに現われた中日コミュニケーション・スタイルの特徴の変化

以上の中国語のデータ分析の結果を、話者交替の「ターン」取りを「自己主張」という特徴の一部を反映している「積極的さ・消極的さ」、「他者配慮・自己中心」の度合いと「直接的・間接的」表現の度合いという角度からさらに分類した結果、中国人と日本人の「ターン」取りに見られた積極的さ・直接的さ・自己中心と他者配慮の度合いはグラフ2-1にまとめたようになる。さらに、グラフ2-2に示す日本語データ分析のまとめと比較しながら、使用言語により、話者交替のスタイルに現われた中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴の変化をとりあげて分析してみた。



(中国語) グラフ2-1: 「ターン」取りに見られた積極的さ・直接的さ・他者配慮の度合いの比較

	積極的	消極的	他者配慮	自己中心	直接的	間接的
中国人	172 (74%)	12 (43%)	39 (78%)	11+9 (90%/76%)	149 (70%)	33 (79%)
日本人	60 (26%)	16 (57%)	11 (22%)	1+3 (10%/34%)	65 (30%)	9 (21%)

(日本語) グラフ2-2 「ターン」取りに見られた積極的さ・直接的さ・他者配慮の度合いの比較

	積極的	消極的	他者配慮	自己中心	直接的	間接的
中国人	79 (56%)	19 (68%)	12 (44%)	6+7 (55%/58%)	80 (62%)	12 (44%)
日本人	61 (44%)	9 (32%)	15 (56%)	5+5 (45%/42%)	50 (38%)	15 (56%)

今回中国語のデータ分析の結果では、話者交替のスタイルにみられた中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴は、日本語のデータとほぼ一致していた。「積極性」、「直接性」、「自己中心」の度合いの差が大きく広がった。

中国人の「自己中心」の度合いは日本人よりいっそう高くなったのが、会話独占者には日本人が1人しか出なかったことに大きく反映されている。またこのように日本人の会話独占者が減ったのは使用言語によるところが大きいとも考えられる。

「間接的」の項目で、中国人が高くなり、中日の結果が逆となったのは、中国人の「自己主張」の角度から間接的「ターン」として計る質問の「ターン」が多かったからである。中国人が積極的にタスクに取り組み、自分の意見や考えを表すと同時に、相手の意見表示を促したり、情報確認したりして、ディスカッション全体の主導権を握っていたような印象もあった。

今回のデータでは、中国人参加者全員がほぼ均等的に発話したのと対照的に、日本語使用のデータに現れた日本人参加者の個人差はかなりあった。例えば、発話回数がゼロ回に近いJ2.1の場合、中国語習熟度が低いこともあるが、日本語によるディスカッションにおいても発話回数が少なかった。日本語データでは長い発話で会話独占したJ1.2が中国人のような中国語表現力をもっているにも関わらず、中国語による討論においては、発話回数も少なく、発話時間も短かった。また、日本語データでは話題の内容に興味があつたため、一回しか発話しなかったJ1.1が中国語データでは8回も発話した。会話独占者の

中で唯一の日本人参加者 J3.1 が日本語データでも中国語データでも積極的に自分の意見を主張した。このようなばらつきも含めて考えると、非母語である中国語の使用により日本人の積極的さがある程度抑えられたのは否めないが、一概に言語による影響とは言い難い。日本人の議論に対する消極的な姿勢がここでいっそうはっきりと現れたといえよう。また、今回のデータ分析の結果は、集団内における協力の仕方についても、「日本人は集団意識が強く、よく協力し合っているのに対し、中国人が皆ボスになりたがっているため、自己表現欲が強い」（Nadamitsu et al, 2000）という指摘とは一致しなかったことは再度確認された。

「他者配慮」の度合いでは、中国人が日本人よりも高いという日本語データと逆転した結果になった。この変化がみられたのは、言語による中国人のコミュニケーション・スタイルの特徴そのもの自体が変わったというよりも、中国人の本来持っている「他者配慮」という側面が、従来の小集団研究によって観察され難かった点が、異文化のメンバーたちが直面して話し合うという「場」において、母語中国語という言語有利のコンテキストにおいて、現われやすく・観察されやすくなったと考えられる。

今回のデータ分析では、全体からみると、中国人と日本人の話者交替の「ターン」とりには、使用言語の影響により、言語表現による反論の仕方や話者独占者の有無などに違いが、いくつかみられたが、いずれも量的なものにすぎず、全体として、日本人があまり「自己主張」しないという質的な変化は見られていない。話者交替に現れた中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルには、根本的な変化をもたらさなかったといえよう。

さらに、討論参加者の外国語の習熟度・使用頻度からみれば、日本に在住している中国人の日本語による討論と比べて、中国語による討論が日本人にとってはかなり不利であった。しかし、このような言語不利の状況におかれていたにもかかわらず、日本人参加者がこれだけの発言権を取れたことから、逆に日本人の自己主張の弱さよりも強さを覗かせたのではないかと思われる。

以上の分析の結果は、スコロン&スコロン（1991）による、文化背景の異なる人々がコミュニケーションをしているとき、同一言語を使っても、それぞれが気づいていないにもかかわらず、自文化の発想に影響されるとの指摘と一致した。一方、林（1996）の日本らしさの構造についての研究において、日本人は使用言語を変えるとその人のらしさも変わるという点が、話者交替にみられた「自己主張」のスタイルに関する本研究においては観察されなかった。

## 5. 考察

### (1) 言語による中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの特徴に見られた相違点の変化

今回の中国語データ分析にみたように、中国人と日本人の話者交替のスタイルに見られたコミュニケーション・スタイルの特徴が日本語のデータと全体的に一致していた。したがって、中国人と日本人の話者交替のスタイルを「自己主張」という観点からとらえ直すために、まず、両者の相違点を日本語データと同様に表2にまとめた。そのうえで、使用言語により、それぞれよりはっきりと浮かび上がり、いっそう

際立ち、多様に表れている両者の特徴の相違点について分析してみた。

表2 中日「自己主張」のスタイルの相違点

	中国人	日本人
ディスカッションへの参加形態	1 積極的参与協力型 2 タスク中心型	消極的参与協力型 参加者個別型
発話内容の展開形態	3 直接表明型 4 意見中心型 5 自己中心型	間接反応型 対人中心型 他己中心型

まず討論への参加形態から、中国人の「積極的参与協力型」・「タスク中心型」vs日本人の「消極的参与協力型」・「参加者個別型」がいっそう対照的になった。中国人参加者の各人は、タスクを完成することを優先し、論題に興味があるか否かにかかわらず、とにかく「齊心合力」（皆で力を合わせる）の姿勢をもってディスカッションに取り組んでいた。一方、日本人は、ディスカッションに全員で取り組むというよりは、ある一部の人が積極的に発言するという展開をみせ、個人差がきわだった。聞き手に専念する人がいてもかまわない。「日本語での会話は聞いているだけの参加でも問題とされない」という日本人の協力型が現れているといえる。

また、発話内容の展開の仕方において、中国人の「直接表明型」・「意見中心型」・「自己中心型」vs日本人の「間接反応型」・「対人中心型」・「他己中心型」という相違点は相変わらず、反映された。その中では、中国人が「自己主張」をする際に、意見表示の「ターン」が圧倒的に多かったと同時に「質問」の「ターン」も増えたことで、「間接的」に意見表示する一面もみられたが、一方、日本人の反論にみられた「対人中心型」の「自己主張」には、さらに「対コンテキスト中心型」へと変化し、相手によるだけではなく、言語コンテキストによっても変わりがみられた。

以上の分析でみたように話者交替のスタイルに浮かび上がった中国人と日本人との「自己主張」のスタイルの相違点は、言語による変化がほとんど観察されなかった。中国人の自己主張は積極的さと率直さがより明らかになっているのに対し、日本人の自己主張はストラテジーの多様性がいっそう目立った。中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの特徴として、中国人が熱意・責任感・義務的に主張をしているのと比べて、日本人は個人の立場をわきまえ、控えめに方略的に主張をしていることは再度確認されたといえよう。

(2) 特筆する点・所見

一四 まず、日本語データに観察された特筆した結果、つまり、従来の研究で言われてきたような日本人の対決回避や衝突回避の傾向が、実は相手に応じた会話パターンであり、相手によって自己主張を行う事があるという点は、今回のデータでも観察された。今回の場合では、日本人会話参加者は、非母語である中国語使用という言語不利の状況におかれたにもかかわらず、反論の「ターン」とりが増え、反論の仕方を変えながら、まとまった、論理的な反論を避けて、ソフトな対応で、中国人とは議論を交わしたのに、日本人同士の間には対中国人のような反論をしなかった。日本人は、いつも相手や言語や話題の内容などのコ

ンテキストに応じて、自己主張のストラテジーを使い分ける、そのストラテジーの多様性、より方略的な「自己主張」の仕方がここで再確認できたといえよう。

また、従来の課題設定小集団ディスカッションにおいても、他の中日コミュニケーション・スタイルに関する比較研究においても観察され難かった点として、つまり、「自己中心」的なイメージの強い中国人の「他者配慮」の度合いが日本人よりも高くなったというデータが、中国人にとって母語中国語という言語有利のコンテキストにおいて観察された。これをもって、中国人と日本人との「他者配慮」の度合を比較することよりも、この点が観察されたのが初めてであるため、中国人のコミュニケーション・スタイルの特徴について、多様な研究方法を採用することにより、より包括的に考察する必要があることに意義があるのではないと思う。また、異文化理解において中国人に対して、より多角度からの理解に繋がる一助になることを願う。

### (3) 文化の反映としてのコミュニケーション・スタイル

今回のデータ分析の結果にみたように、コミュニケーション・スタイルは、それぞれの人間が生活してきた文化が色濃く反映している。話者や言語などのコンテキストに応じて多様に変化をみせる一方で、その人々が長年わたる地域社会の生活で積み上げてきた「集団としての記憶」（遠山）である文化は、その地域の人々にとっての常識であり、暗黙のルールでもある。その「暗黙に了解されているルールが破られたときに」文化が意識されるのである（久米ら、1998）。したがって、同じ文化・社会を共有している人同士が話し合うときには、「話し手が属している集団の中でふさわしいと思われる」（タネン、1984）会話のスタイルで会話が行われるため、互いに暗黙に了解されたルールの文化には気づきにくく、むしろ、文化背景の異なる人々とコミュニケーションを行うとき、初めてその違いを文化的に意識することになるのである。今回の中国人と日本人が参加する異文化小集団ディスカッションにみられた、それぞれの文化を反映している中国人と日本人の「自己主張」のスタイルがこれとよく合致しているといえよう。

コミュニケーション・スタイルには対人関係を構築・維持する機能があり、コミュニケーションを行うプロセスのなかで、ダイナミックに変化していることは分かっても、この人間関係のシフトをどのようにとらえるかは聞き手の解釈によって異なる。話し手と聞き手がお互いに同じ人間関係のフレームで相手を捉えていれば問題はないが、それぞれの思惑が異なっていると誤解やすれ違いが起りかねない。とはいえ、これらの相違はそれぞれの社会文化を反映しているため、どちらが優位であるとか、どちらが良いか悪いかというわけではない。このような違いがあるということをよく認識し、異文化の相手とのコミュニケーションに応じる事が大切であろう。

## 6. 結び

本研究は中国人と日本人の「自己主張」のスタイルについて、中日混合メンバーによる課題設定小集団ディスカッションをデータとして、中国語で行ったディスカッションにおける話者交替の回数・パターン・内容（目的）について、日本語による討論のデータ分析の結果を踏まえて、分析・考察を行った。そこに

浮かび上がった発言権の獲得としての話者交替のスタイルの特徴から、中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの特徴の相違点を明らかにし、その上、使用言語というコンテキストの変化によって、中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴がどのように変わっているのかに焦点をあて分析した。

結果として、使用言語にかかわらず、日本語データにみられた中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの特徴の相違点は、つまり、中国人の積極的さと日本人のストラテジーの多様性が依然として、際立っていた。また、中国人の「他者配慮」の側面も中国語のデータにはっきりと現れた。

「自己主張」のスタイルを考察することは、さまざまな分野と関わる学際的な研究に位置づけられるため、本研究のデータ分析が話者交替のみにとどまった点が問題を残す。今後、多角度・多視点から総合的に研究する必要があると思う。

本研究の結果を踏まえて、中国人と日本人のコミュニケーション・スタイルである「自己主張」のスタイルの特徴の相違点を生み出した文化的要因について、考察することを今後の課題とする。

## 参考文献

- 船津衛 (1999) . 『コミュニケーション・入門—心の中からインターネットまで』 有斐閣アルマ .
- Gao, G. & Ting-Toomey, S. (1998) . *Communicating effectively with the Chinese*. Thousand Oaks, CA : SAGE Publications.
- Gudykunst, W., Ting-Toomey, S. & Chua, E. (1988) . *Culture and interpersonal communication*. Newbury Park, CA : SAGE Publications.
- ガンパーズ, J. (2004) . 『認知と相互行為の社会言語学：ディスコース・ストラテジー』 (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘・訳) . 松柏社 . [原著 : Gumperz, J. (1982) . *Discourse Strategies*. Cambridge : Cambridge University Press] .
- 堀口純子 (1997) . 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版 .
- 橋本満弘・石井敏 (編) (1993) . 『日本人のコミュニケーション』 桐原書店 .
- 林知己夫 (1996) . 『日本らしさの構造—こころと文化をはかる』 東洋経済新報社 .
- 侯玉波・朱滢 (著) (2002) . 「文化对中国人思维方式的影响力」 『心理学报』 2002, 34 (1) .106-111.
- 井出祥子 (2006) . 『わきまへの語用論』 大修館 .
- 石井敏・久米昭元 (編) (2005) . 『異文化コミュニケーション研究法：テーマの着想から論文の書き方まで』 [改定版] 有斐閣 .
- 久米昭元・徳井厚子・徐一平 (2000) . 「コミュニケーション様式の日米中比較研究——小集団討論の質的分析を通して——」 研究代表者井上和子『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(4-B)』 (平成8年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告4) .625-672.
- メナード, S. (1993) . 『会話分析』 くろしお出版 .
- メイ, J. L. (2005) . 『批判的社会言語論入門：社会と文化の言語』 (小山亘・訳) 三元社 . [原著 : Mey, J.



- L. (2001) . *Pragmatics : An introduction* (Second Edition) . Oxford : Blackwell] .
- Nadamitsu, Y., Chen. L., & Friedrich, G. (2000) . Similar or different? : The Chinese experience of Japanese culture. In M. F .Collier (Ed.) , *Constituting cultural difference through discourse* (pp.158-188) . Thousand Oaks, CA : SAGE Publications.
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974) . A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50. 696-735.
- Scollon.,R., & Scollon, S. W. (1995) . *Intercultural communication : A discourse approach*. Oxford Blackwell.
- 穴戸通庸・平賀正子・西川盛雄・菅原勉 (1996) . 『表現と理解のことば学』 ミネルヴァ書房 .
- Tannen, D. (1984) . *Conversational style : Analyzing talk among friends*. Norwood, NJ : Ablex.
- 许力生 (2000) . 「跨文化的交际能力问题探讨」『外语与外语教学 』总 135 期, 2000 第 7 期 .
- 張麗 (2009) . 「話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル——小集団ディスカッションを通して——」『異文化コミュニケーション論集』第 7 号, 147-159 頁 . 立教大学異文化コミュニケーション研究科 .